
万屋

aromaman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万屋

【Nコード】

N6891W

【作者名】

aromaman

【あらすじ】

すでに忍村としての機能を失っている伊賀の里を出て、江戸で万屋を営んでいた周造。妻を亡くしたほかは平穏な日々を過ごしており、仕事にも不満を感じたことはなかった。しかし桑名藩家老を務める十二代目服部半蔵の命を受け、仕方なく京での諜報活動を行うことになる。一人娘および生い立ちのせいで性格に難のある少年を伴って上洛し、幕府最後の戦いに否応なく巻き込まれていく……
予定です。

序章

「親父！」

戸口に走りこんできた娘に向かい、ひしゃくから水を飲もうとしていた中年の男が顔をあげ、渋面を作った。

「だから、親父と呼ぶのは止めろと言っておるだろうが。父上と呼べ、父上と」

すると娘は天を仰いでわざとらしくため息をつく。

「は？ 万屋の親父を父上なんて呼ぶものか。武士でもあるまいし」

ほぼ毎日聞かされている台詞に頭を振りながら、男は娘のいでたちを目を走らせた。

「いい加減、それを着るのは止めろ。手も足も、半分以上飛び出しているぞ。みつともない」

すると娘は両手を腰に当て、ものすごい勢いで怒り始めた。

「母さまの命日にはこれを着るって決めてるんだ！ 毎年言ってるだろ？ なんで分からないんだよ。これは、母さまが最後にわたしに仕立ててくれた……」

そこまで言うのと娘の目に涙が浮かび、「親父の馬鹿」と言って外へ駆け出した。

「おい！ ……ったく、あいつが死んでから6年もたつんだぞ」
そういう自分も亡くした妻のことが忘れられず、成長するにつれてどんどん似てくる娘を見て胸を痛めていることは棚に上げる。

ひしゃくを桶に戻し、戸口へ出て空を見上げると、6年前と同じ青空が広がっていた。端午の節句を少し過ぎた皐月の、雲ひとつない、まるで吸い込まれてしまいそうな鮮やかな青空。その空の下で、川から引き上げられた妻の肌が、不自然に白かったことを思い出す。妻の遺体に、当時9つだった娘が取りすがって泣いていた。その後ろで、まるで時が止まったかのようにただただ立ち尽くしていた自

分。目を閉じて深呼吸し、その残像を追ひ払うと、娘の姿を探した。飛び出していった娘は、通りの向こうの井戸の近くで地面を蹴っていた。

墓参りには必ず二人で行く約束をしている。命日のたびに毎年同じやり取りを繰り返しているが、「親父と仲悪くしていると、母さまが悲しむから」と言って、かならず父親をあの場合で待っているのだ。

娘のほうへ歩き始めたとき、2軒隣の長屋から初老の女性が出てきた。片親の娘をいつも気遣ってくれる優しい人で、娘もよくなっている。

「今日は命日だったね。これから行くのかい？」

近所の人たちは、あの着物を着ていれば命日だとわかっているからまだ良い。しかし寺までの道中すれ違う人々は、「あんなものを年頃の娘に着せて。かわいそうに……」とでも言いたいかのような非難の視線を投げかけてくるので、正直、もう止めてくれと思う。

大切なのは物ではない。心だ。

妻を亡くしたときから、娘には身を守る方法と称してさまざまな体術を教えてきた。そのおかげで、すらりと伸びた足はほどよく絞まり、身のこなしもしなやかだ。

そんな娘の後ろを歩きながら、周囲に目を走らせた男は（勘弁してくれよ……）とげんなりとした表情を浮かべた。

今年も娘は注目の的だった。今年もというより、これまで以上に注目を集めている。さすがに十五にもなれば子供らしさは消えかけており、男たちは好色な視線を送ってくるし、女たちは眉をひそめる。その両極端な視線を浴びても、一向に気にすることなく、娘はただ前を向いてスタスタ歩き続けていた。

寺までの道のりが、まるで苦行のように感じられる。深いため息をつく、娘が振り返った。

「早く歩けよ、親父」

「親父と呼ぶな。そして話しかけるな。その着物を着ている間は、俺とお前は他人だ」

周囲の視線が痛い。

すると娘はニヤリと笑い、父親のもとへ行くと腕を組んだ。

「離せ」

「嫌だ」

もう限界だ……。そう思い、父親は娘の腕を振り払って走り出した。

「あつ、待て、親父！」

娘は、般若のような表情を浮かべて追いかけてくる。あまり距離が離れ過ぎないように調整しながら、男は走り続けた。

依頼

寺の境内をフラフラ横切ってくる男を見て、和尚はにんまり笑った。あの父娘がやってくると、静かな境内がいきなり騒がしくなる。父親の様子を見る限り、今回は特にすごそうだなと思ったのだが、石段を登り終えて姿を現した娘を見て驚愕した。

「なんだ、小夜。その格好は」

母親の命日には毎年同じ着物を着ているが、この一年でぐっと身長が伸びたようで、より一層肌が露出している。小夜がかがめば、後ろにいる者には中まで見えてしまうのではないかと思われた。

「頼むよ、和尚。こいつに今回限りであの着物を着るのは止めるように言ってやってくれ」

父親は息を切らして膝に手をつき、汗まみれの顔で見上げる。

「自分で言えば良からう。己の娘だ」

ふん、と鼻を鳴らした和尚に、父親は憮然とした表情を浮かべた。「言っただよ。言っても聞かないんだ。おかげで俺は道々変態扱いだよ」

同じく足をふらつかせながら到着した小夜は、「日ごろの行いが悪いから、そういう目で見られるんだよ」と言いながら、顔に浮いた汗を手の甲で払う。

「日ごろの行いって……。何を言っただよ。お前の着物のせいだろう。女郎だってそんなに肌は出してねえぞ」

「女郎？ まさか親父、金で女を……」

わざとらしく驚いてみせる小夜を見て、父親のこめかみに青筋が浮かんだ。

「お前、親を馬鹿にするのもいい加減に……」

「二人とも、もう良い！」

これ以上騒がしくなってはたまらんと、和尚の恫喝が響いた。

「早く桔梗に会いに行つてやらんか。かわいそうに。きつと待ち

かねておるぞ」

はい……とつぶやくように返事をする、二人揃って墓場へ向かう。その背中に、和尚が声をかけた。

「おお、そうだ。周造、あとで話がある。墓参りが終わったら、寺のほうへ顔を出してくれんか」

振り返った周造が、探るような視線を送ってくる。

「話とはなんだ。まさか……」

「だから、墓参りが終わった後だ。ちと長くなりそうなので」周造の目が一瞬射るようにすがめられたが、小夜にせかされ、仕方なく後を追う。

（まさかな……）

眉間に深い皺が寄ったのは、目の前で揺れる小夜の太もものせいだけではなかった。

墓参りの間も、和尚の言葉が気になって仕方がなく、周造はずっと黙りこくったままだった。沈黙したまま墓石を洗う父親を見るうちに、小夜もなぜか不安になる。

（いい加減、これはまずかったかな）

自分の着物を見下ろし、ため息をつく。指摘されるまでもなく、さすがに今回はまずいと思った。しかし別の着物の上に重ねて着るには小さすぎる。

正月用にと母が仕立ててくれた、桃の花の絵があらわれた薄緑色の着物。「本当に良く似合うね」と自分を眺めている母の優しい眼差しが懐かしかった。

しかし去年まではにこやかに迎えてくれた和尚の咎めるような視線を受けて、やはり止めたほうが良かったのかと想い、気持ち沈む。もしかすると、自分の姿を見た母も、墓の中で呆然としているかもしれない。

来年はこの着物は諦めよう。そう決意したが、父親を喜ばせるのがなんだか癪で、言うのは止めておいた。

大事な話があるからここで待てと言われた小夜は、境内ですずめを眺めながらぼんやりしていた。

周造と和尚は、奥の座敷で向かい合ったまま、沈黙している。ふいに和尚が「依頼があった」とため息交じりに切り出した。

「依頼？　なんだ、妻の不義を調べるとか？」

分かっているくせに、周造はわざととぼけて見せる。

「ふざけるような話ではない」

「もう依頼などないと思っていた。伊賀はもう、忍の村ではない」「そうなのだが……」

確かに、現在の里には忍として暮らす者はいない。みんな農民や商人として暮らしており、伊賀・甲賀の忍者衆を束ね、徳川家康に仕えたという二代目の栄光は、すでに伝説と化していた。

「だからこそ、お前は貴重な人材なのだよ。十二代目直々の依頼だ。避けられぬ」

（なんだよ。十二代目とはいえ、俺の主君じゃないってのに）

十二代目の服部半蔵正義は、現在桑名藩家老を務めている。藩主の松平定敬が京都所司代になったため、補佐をするため現在は京都に赴いていると聞いているが……。

「京に来いと言っているのか？」

「ああ。お前らは十二代目の元で働いてもらう」

「お前ら？」

嫌な予感がした。

「そうだ。……小夜も鍛えておるのだろうか？」

「護身のためだ。桔梗みたいに、他人を助けるために自分があつけなく死んでしまわないようにな。しかもあいつにはまだ、俺の出自について話しておらん。……話すつもりもなかった」

周造が苦虫を潰したような表情を浮かべると、和尚は悲しげな表情を浮かべる。

「確かなあ。桔梗は優しい女だったからな」

当時の小夜と同じ年頃の男児が溺れかけているのを見かけた桔梗は、迷わず助けに川に入った。子供を岩場に乘せた方がいいが、自分は水を吸った着物の重さに負けて、そのまま流された。通りかかった薬屋が泣き叫ぶ子供の言葉に従って川を下ってみると、すでに息のない桔梗が岸に打ち上げられていたのだった。

桔梗は普通の女だった。料理と裁縫が得意で、いつも朗らかな笑みを浮かべている良き妻であり、良き母だった。

二人は鎮痛な表情を浮かべたまま、沈黙する。

が、空気を変えようとするかのように、和尚は膝をポンと叩いた。「それと、お前に紹介したい奴がいる」

奥に向かって「貞晴」と声をかける。同時にスツと襖が開いて、年の頃は十六か十七ほどに見える若い男が姿を現した。

つややかな黒髪をひとつに束ね、面長ですっきりとした顔立ちの少年が、人のよさそうな微笑みを浮かべてこちらを見ている。しかし、その目は……。

和尚に尋ねるような視線を向けると、困ったような表情が返ってきた。

「こいつは……あの壮兵衛が育てた。山に捨てられていたところを拾ってきたと言っていたが、それが本当かどうかは知らん」

「壮兵衛？ あいつがか」

いつまでも忍にこだわって、一人廃墟のような小屋に住んでいた。かつて織田信長に恐れられたほどの伊賀の里を再興するのだと、ひたすら技術を磨くことだけに専念し、身なりにはまったく構わない。仕事もしないので金もなく、山で時々動物を狩るほかは、村の農家の野菜を盗んで食べていたらしい。村人はみんな壮兵衛が野菜泥棒だとわかっていたが、関わるのが嫌で黙って耐えていると聞いている。

「そうだ。で、あやつは先日、頓死してな。こいつは一人きりになったんだが、仕事を探そうにも壮兵衛のせいで村の奴らは関わりたくないという。それでこちらに呼び寄せた。……そこで相談なの

だが」

「断る」

「……まだ何も言っていないぞ」

「だいたい予想はつく」

「貞晴を預かってほしいのだ」と、和尚はまるで拒絶されていないかのように、さらりと言い放った。

すると周造の表情が険しくなり、ゆっくりと首を横に振る。

「うちには年頃の娘もいるんだ。冗談じゃない。それに、子供二人を養えるほど裕福でもない」

「子供じゃない」と、貞晴は相変わらずにこやかな笑みを浮かべながら唐突に口を挟んだ。

「別に、養ってもらうつもりはない。必要な金は自分で稼ぐ」

どうやって稼ぐつもりなんだ、と周造はいぶかしんだ。今までは壮兵衛のもと、修行だけに明け暮れていたに違いない。金の稼ぎ方など、あいつが教えるはずもないだろうと思う。

それとも……。

「うちはまっとうな商売をしているんだ。掬りとかそういう怪しい稼ぎは認められん」

するとにこやかな笑みが皮肉めいたものに代わり、「亭主の不逞やら何やらを調べるのがまっとうな商売なのか？」と見下したような視線を投げてきた。

周造のこめかみに血管が浮き上がる。

「少なくとも、誰かの役に立つ仕事をしているつもりだ。掬りなどと一緒にするな」

「掬りをするなんて一言も口にしていない。俺は、十二代目の仕事を請けて金をもらうだけだ」

なんだ、このくそ生意気な餓鬼は。あの勝気な小夜がこいつと会ったら、どんな火花が散るか分からない。不必要なやつかいごとはごめんだ。

周造が睨みつけていると、和尚が再び口を開いた

「こいつを連れていけば、小夜は働かせずに済むかもしれんぞ？」
ずるい爺め、と今度は和尚を睨む。

「鼯鼠の客も増えてきたというのに……。万屋の仕事を放り出せ
というのか」

「仕方あるまい。長期休業ということにして、すぐ旅の準備を始
めてくれ。京で生活を始めるための準備金も十分用意してある」

「わかった。……こいつを連れて行く代わりに、小夜を寺で預か
ってもらう訳にはいかないか？」

「本人がそれでいいというなら、預かって構わん」

周造が目をやると、貞晴は再びにこやかな笑みを顔に貼り付けて
いた。

相性最悪

「では、小夜を呼んでくれんか」

貞晴を睨みつけている周造に、和尚が声をかける。周造は渋々立ち上がると、境内へ向かった。

呼ばれて座敷にやってきた小夜はすぐ貞晴に気づき、胡散臭い物を見るかのような視線を投げた。

「小夜、お前の父親は、この貞晴と共に京へ行くことになった。向こうにいる間、お前を預かってほしいと頼まれたのだが……」

「なんでだよ。こいつ、誰だよ」

小夜は貞晴から目を離さないまま、誰にともなく尋ねる。

「急な依頼が入った。京は今、佐幕派と尊皇派の争いが激しくなっているし、辻斬りなんかも盛んに行われている。そんな危険な場所にお前を連れていく訳には……」

「依頼ってなんだよ。今まで江戸でしか請けてなかったじゃないか」

周造の説明を遮って、小夜が声を荒げた。

「それに、こいつは誰なんだよって聞いているじゃないか。取ってつけたような笑い浮かべてさ。こんな怪しい奴と一緒に京に行くのかよ」

「そんなおかしな格好をしているお前こそ、怪しいことこの上ない」

黙っていれば良いのに、貞晴が口の端をゆがめて笑いながら言った。

「なんだと？ わたしはこいつの娘だ。お前はどこの誰なんだよ」

「言う必要があるのか？」

せせら笑いを浮かべたまま、貞晴は和尚に尋ねた。

和尚はため息をついて、周造に目を向ける。説明するとなると、周造の出自から説明しなくてはならない。

「隠し事はするなよ、親父」

殺気だった視線を受けて、周造はうなだれた。

面倒くせえな、もう……。

「俺だって今さっき初めて会ったんだ。お前に説明できるほど詳しくは知らん。俺の生まれ故郷から来たこと、捨て子としてそこで育てられたってことだけ聞いたばかりだ」

「で、なんでそいつが親父と一緒に京都に行くことになるんだよ」

「いや、だから……。こいつを育てた奴が相当の変り者だったんだよ。そのせいで村人たちに敬遠されていて、仕事が見つからないらしい」

「は？　それが京へ一緒に行くってのどうつながるんだよ？

故郷が同じだってだけで、まったく関係ない奴なんだろ？」

「まあ、仕事に役立つだろうからって」

納得するはずはないと分かっていたが、とりあえず言ってみる。

「……わたしも行く」

小夜の言葉に、和尚は首を横に振り、深いため息をついた。

「まあ、そう言うだろうとは思っておったが」

すると、貞晴は「こんなちんけな女、ただの足手まといだろう。しかもこんな肌をさらしても、色気のいの字も感じない。何の役に立つんだ？」とせせら笑う。

「なっ……。別に色気を出したくてこんな格好してるんじゃないよ。お前にわたしの何がわかるってんだ」

小夜は顔を真っ赤にして、勢い良く立ち上がった。

そのまま貞晴につかみかかろうとしたので、周造は慌てて腕を掴んで引き止める。

「やめとけ、小夜。……お前もいい加減にしろよ。俺はこいつの親父だ。これ以上目の前で娘を侮辱し続けるなら、俺が相手をすることになるぞ」

貞晴を睨みつけると、人を小ばかにしたような笑顔を浮かべている。

「やってみるか。長年なにもしてこなかった中年に、俺が負けるはずはない」

こいつ、俺を試しているのか？ 一瞬頭に血が上って立ち上がろうとした周造は、なんとか感情を抑えると、ドスンと床に腰を下ろした。

忍はどんな状況でも、感情を押し殺して任務に当たらなくてはならない。たとえ仲間が目の前で殺されそうになっても、だ。冷静に状況を判断し、主のもとへ必要とされる情報を確実に届けなくてはいけない。

「怖気づいたか」

貞晴はまだ挑発を続けている。

「別に。これから旅の準備をしなくちゃならないのに、餓鬼の相手をしている暇はねえよ。時間ができたら、たっぷり相手してやるさ」

「やっぱり、わたしも京へ行く。止めても無駄だ」

口を開きかけた周造を睨みながら、小夜は唸るように宣言した。

「親父がこいつを叩き潰すところを見たい」

「いや、お前、叩き潰すとかそういう意味じゃ……」

「なんならわたしがこいつを叩き潰してもいい。護身のためにいろいろと鍛えてもらったしな」

「何言ってるんだ。こいつとは鍛え方がまったく違う。お前じゃ絶対無理だから。馬鹿なことを言うなよ」

「やってみなきゃ分かんないだろ」

親子が言い争っていると、「俺は別に今でもいいが」と貞晴が立ち上がるとした。

「貞晴、お前はもう少し礼儀というものを覚えろ。これから世話になる相手に喧嘩を売ってどうする」

それまで成り行きを見守っていた和尚が、重々しく口を開いた。

「どうしても周造とうまくやっていけないのなら、お前はここでわしと共に寺で住職見習いとして過ごしてもらおう」

すると貞晴は涼しい表情で腰を下ろした。どうやら住職にはなりたくないらしい。

「小夜、お前は京に行きたいのか？ それなら、親父の言葉に逆らってはならん。今後一切、口答えするな。親父の手に負えないと分かった時点で、すぐに江戸に帰ってきてもらうからそのつもりで。周造の出自と今後の任務についての詳細は、道中親父から直接聞きたい」

周造は（俺が説明するのかよ。勘弁してくれよ……）とため息をつく。

「周造は……まあ、がんばれとしか言えんな」

同情混じりの和尚の笑みに、周造はがっくりと肩を落とした。

なんでわざわざ物騒な場所に、こんな手のかかる餓鬼二人を連れていかなくてはいけないのか。自分はもとより娘の命も危険に晒すことになりそうで、ひどく憂鬱な気持ちになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6891w/>

万屋

2011年11月13日19時30分発行